地域づくり表彰

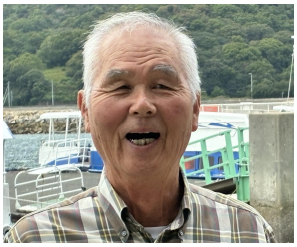
香川県丸亀市

官民連携の島おこし 地域再生プロジェクト

広島地区活性化協議会

会長

白賀（しらが）　誠治（せいじ）



１．丸亀市と離島の概要

香川県丸亀市は、讃岐平野の沿岸部ほぼ中央に位置し、石垣の名城と称される丸亀城を中心に発展し、また古くから海上交通、金刀比羅参詣の要衝としても栄えてきました。

市の北部に広がる風光明媚な瀬戸内海には、丸亀市の５つの有人島（本島、牛島、広島、小手島、手島）があります。なかでも、塩飽水軍の本拠として栄えた本島は、多くの歴史的･文化的価値の高い資産に恵まれ、また、その西に位置し塩飽諸島最大の面積をもつ広島は、古くから「青木石」を産出する採石業の島として知られています。



市のシンボル「丸亀城」

２．活動開始の背景・経緯

【島の高齢化と地域再生の高まり】

近年、日本全体で少子高齢化や人口減少が進む中、生活環境の制約が大きい離島では、その影響がより深刻に現れています。丸亀市の離島においても、かつて 7,000 人を超えていた人口が、2020 年の国勢調査では約 530 人まで減少し、高齢化率は 68%に達しています。

丸亀市の離島は、本島・牛島からなる「本島地区」と、広島・小手島・手島からなる「広島地区」の２つの生活圏に分かれ、それぞれ異なる航路で結ばれています。特に広島地区は、本島地区に比べさらに人口減少が著しく、高齢化率も 78%と生活共同体としての地域コミュニティの維持そのものが困難な状況となっていました。こうした危機感を背景に、地域の再生を目指す「島おこし」の機運が住民の間に高まりました。

【旧家「尾上邸」を拠点に島おこし】

私たち広島地区の「島おこし」は、江戸時代に廻船問屋として栄え、後に日本遺産にも認定された旧家「尾上邸」が原点です。

「島の衰退を何とか食い止め、確かな形で次世代へ引き継ぎたい」その一心で、子どもや若者がほとんどいない島に暮らす高齢者たちが立ち上がり、2019 年に「讃岐広島・小手島・手島活性化協議会」（現・広島地区活性化協議会）を結成しました。

そして、尾上邸を体験宿泊施設に改修し、島おこしの拠点として、地域住民主体の農泊事業（農林水産省事業）が始まりました。一軒の古民家の再生が、島の未来を切り拓く大きな一歩となったのです。



「尾上邸」と島の有志たち

【３つの島の未来航路 共創プロジェクト】

2022 年４月、市行政においても、丸亀城の石垣復旧や市内の福祉活動、スポーツ振興など、以前から多方面で協力関係にあった株式会社トリドールホールディングス（以下「トリドール HD」）との間で地域活性化包括連携協定が締結され、双方がこれまで以上に結束し「共創型地方創生」をめざすことを確認しました。

そして同年５月には、トリドール HD より丸亀市の離島、特に広島地区の深刻な状況に鑑み、島民一丸となっての活動を側面から支援することを目的に、企業版ふるさと納税（5,500 万円）の申し出がありました。

これを受けて、丸亀市としても 2022 年度から 2024 年度までの３年間を「広島地区の集中再生期間」と位置づけ、官民連携で島の活性化に取り組む方針を固めました。



共創プロジェクト結団式

こうして、広島地区活性化協議会、トリドール HD、丸亀市の３者の思いが一致し、私たち島おこしの活動は、同年 10 月から３者合同での『３つの島の未来航路 共創プロジェクト』という新たな挑戦に舵を切ることとなりました。

【玄関口「江の浦港」の賑わい創出】

広島の南部に位置する江の浦港は、丸亀港から客船で約 20 分、フェリーで約 40 分の場所にあり、広島・小手島・手島の３島を結ぶ玄関口として、多くの島民や観光客が利用する重要な交通拠点です。

そこで本プロジェクトでは、江の浦港の待合施設を、単なる切符売場や待合所ではなく、地域の交流と賑わいを生み出す拠点として再整備することとしました。施設には、海風を感じながらくつろげるオープンテラスや、物産販売コーナー、軽食などを提供できる設備等を整備しました。さらに、屋上には瀬戸内海を一望できる展望デッキを設け、訪れた人々がゆったりとした島時間を楽しめる空間を創出しています。

こうして、江の浦港に人々が集い、交流し、地域再生のキーステーションとなる新しい施設が誕生しました



新しい「江の浦港船客待合所」

【地域住民による自主運営】

待合所の整備にあたっては、完成後も住民自らが運営することを前提に進めました。そのため、まず市が所有していた既存の建物を私たち地元組織が譲り受け、地域住民が主体となった整備体制を整えました。

整備にあたっては、市やトリドールHDからの技術支援を受けながら、施設の構想から、設計・工事発注までを担い、完成後の運営についても地域住民の話し合いで一つひとつ決定しながら進めていきました。

こうして苦心のすえに完成した新しい「江の浦港船客待合所」では、土日祝日限定で運営する「みなとのピザ屋さん」が施設の魅力を高めています。



「港のピザ屋さん」とスタッフたち

店では、地元で捕獲したイノシシの肉をトッピングしたオリジナルのピザや特産「青木石」の石臼で挽いたコーヒーなど、地域資源を活かしたメニューが来島者や島民に親しまれています。また、待合所の代理店業務やレンタサイクル事業など、年間を通じた安定収入も確保しており、地域住民による自律的で持続可能な運営が実現しています。

3．働く場の創出と深まる地域の絆

リニューアルした待合所では、移住者や島外の人も含めた新たな雇用が生まれ、「尾上邸」と合わせると、現在14人が働いています。ただし、スタッフ個々の業務量はそれほど多くはなく、新たな島の仕事を広くシェアすることで、一人の業務負担を少なくするとともに、島で働く人たちの交流の場にもなるよう配慮しました。

また、定期的に開く「スタッフ会議」では、自由な意見やアイデアが寄せられ、何でもできることから実行しています。今年の夏には地域の「盆踊り」も復活し、大いに賑わったところで、こうした実践の繰り返しにより、移住者を含め「地域の絆」が日増しに深まっています。



復活した地域の盆踊り

4．企業とのパートナーシップ

本プロジェクトの大きな特徴として、外食産業を営むグローバル企業トリドールHDとの力強い協力関係があります。その一つに、「丸亀製麺」の社員研究所「心の本店」が島内に整備され、毎年全国から多くの社員が島を訪れ、地域住民との交流などを通じて、地域の魅力や課題に触れる機会となっています。

また、当企業の主催で、島に作付けられたうどん用小麦の収穫体験や「うどん打ち教室」なども行われ、ここ広島が「讃岐の食文化うどん」を一から学ぶことのできる貴重な体験の島ともなっています。



丸亀製麺「心の本店」

5．未来への希望！小中学校の再開

プロジェクト開始から3年を経て、小学校が15年ぶり、中学校が16年ぶりに再開されました。学校の再開は、何よりも私たち島民にとって未来への大きな希望となっています。

もともとは、子どもを持つたった一つの世帯から移住相談を受けたことをきっかけに、市に休校中の学校の再開を熱望したのが始まりです。

市教育委員会も非常に難しい判断だったとは思いますが、官民連携で地域再生に取り組んでいる状況を踏まえ、最終的に再開に踏み切ってもらえました。その後、子どもを持つ3世帯が続けて移住され、現在未就学児（3人）を含めて子どもが12人となりました。運動会や授業参観、文化祭などには、島中の人たち、さらには島外の学生や関係者も参加し、地域ぐるみで子どもたちを育む環境が整いつつあります。



青空のもと、合同運動会

6．今後の展望

プロジェクト開始から約5年が経過し、その間20人の移住者を迎えるなど、島には着実な変化が生まれています。当初、高齢者ばかりの住民組織で始めた「島おこし」、小さな待合所の改修をきっかけに協議会メンバーも若返り、活動の輪は、教育環境の再生へと広がりを見せています。静かだった校庭には、子どもたちの声が響き渡り、島に新たな希望が芽生えています。

一方で、担い手不足による住民組織の脆弱性など、真の地域再生に向けては多くの課題が残されています。確かな島の未来を後世に引き継ぐため、これまでに培った人と人との絆をかけがえのない財産として、官民連携による持続可能な仕組みづくりなど、私たちはこれからも、島の再生に挑戦し続けてまいります。